

苦節十年正気と共に「甲辰の国難」

但野正弘

一 はじめに

皆さんお早ようございます。お忙しい中おいで頂きましてありがとうございます。

今年の水戸学講座も、本日第四目を迎えました。当初予定致しておりました私のテーマは、「苦節十年正気と共に」「甲辰の国難」から海防問題へ」となっております。しかし、準備をしております過程で、いろいろ考えるところがありました。海防問題まで触れるのは、時間内に難しいだろうということで、今回は、甲辰の国難、則ち藤田東湖先生が処罰を受けて足掛け九年、蟄居謹慎という苦しい生活を送らなければならなかった、その時代に焦点を当てることに致しまして、海防問題のことは、東湖先生が自由の身となって再び活動を開始し、やがては「天下の藤田東湖先生」と称されるに至ったペリー来航以後のことと併せて、今回の杉崎先生のお話の方で触れて頂くことにしたいと思います。

今日は、甲辰の国難を中心に、東湖先生がどういう生き方をされたのか、そういう話をさせて頂こうと思えます。

二 烈公、幕府から褒賞を受く

お手元に配付されております資料をご覧下さい。

前回の仲田先生のお話の最後に、烈公が幕府から表彰されたということがございました。その点をまず復習を兼ねて振り返りながら、話を進めてまいります。

天保十四年（一八四三）、烈公数え年四十四歳。この三月に、幕府から烈公に対し江戸に出るようにとの要請がございました。それは、十二代将軍家慶が日光廟に御参りをするから、一緒に行くように、ということでありました。

三月十八日に江戸へ出た烈公は、四月十七日に将軍に従いまして日光廟に参拝を終え、二十三日に江戸に帰って参りました。間もなく将軍から登城するようにとの命令があり、五月十八日に登城致しますと、将軍から烈公に対し、藩政が実に行き届いている。所謂水戸藩の天保の改革が非常に成果が挙がり、他の藩の模範となる。そこで、太刀・鞍鐙・黄金を賜い褒賞するということになりました。

『水戸藩史料』（別記上）によりますと、その時次のような言葉を将軍から受け

ています。

源義殿之遺志御継益被_レ励ニ誠忠一候様可_レ被_レ成候。

源義殿、義公（光圀）の遺志を継いで、さらに誠忠をもって藩政に励むように、という内容で、烈公にとってみれば、身に余る言葉を將軍から貰ったのであります。烈公の生涯の中で最も得意と言いましょいか、脚光を浴びた時期でありました。

そして六月には、烈公は江戸から水戸に帰ります。この時は江戸から房総半島の方を回って帰国されます。とにかく意気揚々として六月十八日に水戸城に帰って来られました。

水戸に帰りますと、次々と更なる改革を実施して行きます。

六月二十八日には、弘道館の中に医学館を開設し、八月にはこれに「贅天堂」と命名されました。現在の水戸市立三の丸小学校の敷地のところであります。烈公は自ら『贅天堂の記』という館記を作っております。

この医学館には、町や村の医者達も入学を許可されました。そして地方の農村などで病気で苦しんでいる者、あるいは貧しくて薬など飲めない者、そういう者にもどんどん薬を施して行くことを実践し、さらに天然痘の予防接種、種痘を各地で実施することを命じています。

七月には、水戸の東照宮の祭儀を唯一神道に改正しました。これは神社でありましたが、お坊さんが神社の祭祀をしておりました。この人達を別当というのです。お坊さんが神社を管理していたわけです。烈公は「それはおかしい。神社はやはり神社でなければならぬ。」というので坊さんを追い出し、任命された神主さんが神社の業務を行なう、というふうに改めました。

十二月には、幕府に対して、水戸領内の検地が終了しましたと、検地終了の報告を致します。この検地が開始されたのは天保十一年七月二十日からで、終わったのは十三年十一月でしたが、いろいろな事務処理をしまして、十四年十二月に終了の報告となったわけです。

年が改まりまして天保十五年、この年の十二月二日に改元されて弘化元年となります。干支は甲辰（きのえたつ）、音読みで「こうしん」と読む問題の年が巡って来たのであります。

しかしまだ、春から夏の初めにかけては、水戸藩は意気盛んであります。特に三月二十二日には千波原において第五回目の追鳥狩が実施されました。これは実に

大規模で盛大であったようです。五回目になりますので、他藩の人も注目しまして、いろいろな人が見学に来ております。

例えば、埼玉県深谷市、そこに血洗島という土地があります。そこで生れ育った渋沢栄一が小さい頃から学問を教わったのが尾高新五郎という十歳年上の従兄です。その尾高新五郎もこの天保十五年の水戸千波原における追鳥狩を見に来ています。記録によっては、お祖父さんと一緒であったとも、またお父さんと一緒であったとも書かれておまして、どちらであったか定かではありませんが、とにかく水戸まで見物に来ております。

このように大勢の人が見物に来たようでありまして、盛大な追鳥狩が行なわれましたが、しかしこれが、烈公が直接参加された最後になります。

追鳥狩は五回目を実施してから、一時中断されまして、安政になって復活され、合計九回行なわれましたが、烈公は一回目、三回目、四回目、五回目と、計四回だけ参加されました。二回目は堀原、現在の堀原運動公園付近で行なわれましたが、病気の為に出られませんでした。

この五回目の時には、松平七郎麻呂、後の慶喜公も当時八歳でありましたが参加されております。もちろん子供ですから鎧はつけませんが、陣羽織を着用してお父さんの烈公と一緒に参加しています。

この天保十五年（弘化元年）三月の追鳥狩は非常に盛大であると同時に、烈公にとっても前年に幕府から表彰されておりますから、意気も高まっております。

NHKの大河ドラマ「徳川慶喜」の第一回目で、この場面が出てきました。鎧に身を固めた烈公が、馬で水戸城の城門を入れて来られます。やがて鎧を解いたあと、そつと座敷が上がって、踏み台を持って来て、板で囲ってある部屋の中を上から覗くと、そこに少年が大の字になって寝ている。これが七郎麻呂で、上の方からお父さんがコラツと怒鳴る場面がありました。

実はこれは事実にしておりまして、この時は、お父さんと一緒に七郎麻呂も追鳥狩に参加していました。帰ってくると七郎麻呂は非常に疲れまして、そのまま寝てしまうのです。お父さんは、七郎麻呂を抱いて寝室に連れて行って寝かせるといふ、父親らしい愛情を込めた対応をしています。テレビでは、他の場面と混同して描かれているところもありましたが、とにかく、追鳥狩に係わる場面がありました。

さて、天保十五年、以下は弘化元年に統一して申し上げますが、三月までは、そういうことで、水戸藩は非常に活気があり、意気も上がっております。

ところが四月中旬になって、一大事件が持ち上がって来ます。

三 弘化甲辰の国難

弘化元年四月十六日、当時の老中阿部伊勢守正弘が、水戸藩の家老中山備後守信守を屋敷に呼び付け、藩政等に関し次のような七箇条の嫌疑について尋問が行なわれました。

七箇条の嫌疑

- 1 鉄砲連発の事
- 2 御勝手向御不足の御申立には候へ共左迄には有^レ之間敷事
- 3 松前今以御望み有^レ之哉の事
- 4 諸浪人御召抱の事
- 5 御宮御祭儀御改の事
- 6 寺院破却の事
- 7 学校土手高さの事

藤田東湖『甲辰日録』

- 1 鉄砲連発の事というのは、追鳥狩で鉄砲を撃ったことです。
- 2 財政が苦しいと言っているけれども、実際にはそれ程ではないじゃないか。それなのに幕府に援助をしてくれと言うのはどういう事か、ということですね。
- 3 松前は、現在の北海道のことですが、烈公は松前に領地を頂きたいと幕府に申し出ておりました。これは義公以来の考えがありまして、蝦夷地を開拓して、日本にとっては重要な所であるから、同時に北方の警備に当りたい。こういう事で申し入れているわけです。
- 4 浪人をどんどん召し抱えているが、これはどういう事か。という嫌疑ですが、実際には弘道館で武術を教える講師として、二、三人招いただけでありません。
- 5 これは、水戸東照宮のことで、前年の七月に、お坊さんが祭る形式から神官が祭る形に変えました。これについて、これまで長い間、僧侶がお祭りを行なって来たのに、追い出して祭儀を改めたのはどういう事か、ということですね。
- 6 寺を次々と潰しているのはどういう事か。
- 7 弘道館の土手、大きな銀杏の木がありますね。あの土手を高くしたのは何故

か。これは幕府に願ひ出て、これこれの高さにしますと、許可を貰っていることであつて、何ら問題があるわけではありません。

と、というような内容で、とにかく1から7まで、全く意味のない嫌疑でありました。

そこで、翌日十七日に、再び中山信守が阿部老中宅へ行きまして、七箇条に対する申し開きをきちんやりました。普通には、その通りだという内容のものばかりなんです。これは東湖先生の記録や『水戸藩史料』にも載っている事です。

ところが幕府は、十八日に老中連署の奉書を発して水戸へ送り、烈公に江戸へ出てくるように促します。この文書は二十日に水戸に到着致します。

老中連署の奉書（牧野備前守忠雅、阿部伊勢守正弘、土井大炊頭利位）

一筆致_レ啓達_一候、（中略）然_レバ暫_ク御在_レ邑之儀、兼而被_レ仰出_一候得共、御用も有_レ之候間、此節一旦御参府被_レ成候様に御意に候、此旨可_レ有_二洩達_一候、恐々謹言。

〔註。天保十二年七月、幕府は特旨と称し、烈公に在国五六年の猶予を与える。〕

『水戸藩史料』別記下

これを知った中山信守は、今度は口頭では無く、きちんとした答弁書を提出しました。

しかし、二十日に奉書が水戸に到着しました。烈公はこの時、那珂湊の賚寶閣（いひんかく・いんひんかく）に滞在しておりました。知らせは賚寶閣に届きません。烈公もすぐに帰ろうということで夕方水戸城に帰り、老中連署の奉書を見て、嫌疑をかけられた事を承知し、直ちに準備をはじめまして、五月二日の明け方、烈公は水戸を出発しました。

この時、御供として一緒に江戸へ出ましたのが、執政の結城朝道（寅寿）と御側御用人の藤田東湖先生であります。

この日五月二日は府中石岡に一泊、三日には牛久、四日に小金に着き、その日夜八時過ぎに小金を発つて、翌五月五日の四つ時、午前十時頃には小石川邸に到着しましたが、やがて烈公や東湖先生達は、これは「おかしい」と、不安の思いを募らせることができました。

それは、御三家の当主が在藩していて、江戸に出府して来た時は、必ず將軍の命を受けた老中が、無事到着のお祝いの言葉をのべる為に、藩邸にやって来る習わしがありました。ところが、この賀詞の使者が来ませんでした。

この場面は、テレビドラマにも出て参りました。皆さん覚えていらつしやいますか。烈公夫人の登美宮様が、庭の池の端で釣りをされていますね。横の芝生の上で永原帯刀という家来、この人は架空の人物ですが、居眠りをしておりました。すると、登美宮様が、

「永原、おかしいとは思わないかえ。」
と、声をかけました。びっくりして永原は目をさまして、

「なんでございますか。」
とたずねました。登美宮様は、

「そうであろう。殿が江戸に戻って来られたのに、何故、幕府の老中がお祝いの使いとして来ないのか。これは何かある。」
と、言われた場面がありましたね。

正にそのことです。東湖先生も七箇条のことがありますから、これは何かある。幕府の処罰はかなり厳しいであろう。しかしこれは冤罪である。従ってこれを明らかにするために、烈公にこのような嫌疑をかけられる状態にしたのは、まさに御側用人の自分の責任であり、この問題は一切烈公とは関係ない。これは無実の罪であるということを書いて、自分は腹を切ろう。自分が責任を取ることによって烈公の冤罪を晴らそう、と考えて東湖先生は自害を決意したのであります。

ところが間もなく、烈公からのお呼びがあり、同僚の戸田忠敞と共に部屋に行きますと、烈公からご自身の気持を伝える言葉がありました。

烈公は「とにかく無実の罪であることは分かってるが、ここで今、幕府に逆らうことはまずい、自分は幕府の命に従う心算である。いつか必ず罪が晴れる時があるから、軽拳妄動しないように。」と説かれたのであります。

そこで東湖先生は、御用部屋に戻りますと考えました。「自分は死を決意したけれども、それは逆な問題を引き起こす。もし自分が腹を切れば、水戸の斉昭公は本当にそのような罪を犯していて、そこでお側付の藩士が責任を取って腹を切ったと見做される。ということは、無実ではなくて、実の罪になってしまふ。罪を裏付ける行動になるから逆に不忠である。」ということで、腹を切ることをやめました。これが、後にも出て参りますが、東湖先生の三回目の決死の時でありました。

さて、翌日の五月六日に幕府の使いがやって参ります。使いは水戸家の三連枝。連枝というのは分家であります。一人は高松藩主の松平讃岐守頼胤、一人が守山藩主（磐城、福島県）の松平大学頭頼誠、それから府中石岡の藩主松平播磨守頼繩の三人。高松・守山・府中の三連枝が揃って小石川の水戸藩邸にやって参りまして、上意ということで將軍の命を伝えました。

烈公に対しては、致仕、藩主の職を退いて隠居し、謹慎せよ、と命じます。

そして世子の鶴千代麻呂、当時数え年十三歳。後に改名して慶篤に対しては、上使として阿部伊勢守と牧野備前守がやって参りまして、家督を相続せよと命じます。ただ、未だ少年であるので、先程の三連枝が後見となる。こういう命令が申し渡されました。

同じ五月六日に家臣に対する処罰も行なわれ、処罰された者は七人に及びました。

家老の中山備後守と山野辺兵庫頭が差控三十日。差控というのは、出仕を止められて自宅謹慎することです。

家老の奥津能登守が差控五十日。

御用達鵜殿平七が役儀取放・逼塞。役儀取放は免職で、逼塞は閉門より軽く夜間の出入りは可能です。

御年寄戸田銀次郎（忠敞）、御馬廻頭上座御側御用人藤田虎之介、若年寄格寺社奉行今井金右衛門の三人は、役儀取放・蟄居。蟄居というのは禁固刑と同じであります。正式な牢獄ではないのですが、完全に部屋が釘くぎ打うちなどされまして、当人はその部屋から一步も出入りは出来ません。非常に重いものであります。

東湖先生はこうして免職の上、蟄居という重い処罰を申し渡されました。

烈公はこの日の夕方、烏帽子・黒衣の姿で駕籠に乗って駒込の別邸に移って行かれました。この時烈公は数え年四十五歳。まだまだ若いですね。このようにして水戸藩は大変な難儀を蒙ったのであります。これを「弘化甲辰の国難」と呼ぶのであります。

東湖先生にとっては、「三たび死を決して而して死せず」と歌われた第三回目の決死の時でありました。時に年三十九歳でした。後に『回天詩史』を書かれるのであります、その中に次のような反省の言葉が書かれています。

東湖の反省

嗚呼彪 公の殊遇に浴すること他人の比にあらず。而して禍を未萌に察する能はず。尸位素餐。以て我公をして今日の辱を致さしむ。死するも余罪有り。而るに幕府寛仁彪をして生路を得、悔悟する所有らしむ。抑も亦幸なり。此れ彪の死を決して而して死せざるの三なり。

『回天詩史』（原漢文）

文中の「尸位素餐」は、その地位にありながら責任を果たさずに、無駄に禄を

貰っていること。働きもしないで無駄飯を食っていることであります。「余罪」は、償いきれない程の罪と言う意味です。

東湖先生は、他人を恨まない方です。第一回目の開講の挨拶の中で、宮田正彦先生からも、お話がございましたが、東湖先生は他人を恨まれない。どんな苦しい状態になっても、他人の所為にしないで、自分の責任として、自分の問題として、自分はどうだったか、何故こういう状況になったのか、と自ら深く反省される方であります。

四 藤田東湖先生幽囚の日々

1 小石川長屋に蟄居

五月六日は烈公が駒込邸に移られるのを見送り、そのまま藩邸におりまして、翌日の朝、四時頃に小石川邸内にあります厩前の長屋に帰り、以後固く門戸を閉ざして蟄居生活に入りました。間もなく役人がやって来て、殆どの戸は釘打ちしてしまいました。窓の所に小さな隙間を開けて、そこからだけ明かりが入る。本人は家から出られません。世話をしてくれる家僕が二人おりまして、隣の鱸さんという家の境の壁に穴をあけ、そこから家僕を出入りさせ、必要な品物を買わせました。

しかも八畳一間です。当時、武士には自分の持ち家というものはありません。百姓町人は自分の土地建物を持っていますが、武士はありません。家老などの重役には屋敷地が与えられますが、自分のものではありません。藩からの支給であります。何時取り上げられるかわかりません。東湖先生などは長屋住まいです。

その一間に、鎧などの具足箱、挟み箱を置き、沢山の書物などを置きますと、先生の寝起きする処は、一畳半ほどしかありません。そういう処での生活が始まりました。

汗垢と蝨の生活

監察の僚属、時々舎外を巡視す。故を以て家奴の井を汲くむこと、率ね一日一再に過ぎず。僅かに朝夕爨炊の用に供するのみ。余よ本月二日を以て家を発ち、而して前数日疾を獲、故を以て浴せざるもの殆ど三旬、(中略)是の夏日に当り、蒸熱人に逼り、発汗淋漓たり。衣服日に汚れ、臭気鼻を衝く。因りて一たび皮膚を搔けば、則ち蝨亦爪に入る。(中略) 蟻蝨相慶び、而して年豊を禪衣の間に楽む必せり。亦一笑すべし。

『回天詩史』 5 / 26 記事

目付の役人が時々舎外を巡視するので、家僕が井戸の水を汲むのも大体一日に一

回か二回位で、わずかに朝夕の炊事の用や洗面に使用する程度であります。私は本月の二日に家を発ちました。東湖先生は、四月二十八日頃から風邪を引いて発熱し、医者からも江戸へ発つのはやめなさい、と行って止められました。

しかし東湖先生は、これは唯事ではないから自分は命に代えても殿様の御供をする。というので水戸を発つたのが五月二日であります。五日に江戸に着きますが、その間に食べたのは一椀か二椀のお粥だったそうです。あとは食物も受け付けない非常に苦しい状態で、三泊四日の旅をしてくるわけです。これが「前数日疾を獲」ということです。

それ以来ずーっと湯に入っていない。五月二十六日の記事でありますから、前月の二十八日頃から風邪を引いて以来、殆ど一カ月風呂に入っていない。この夏の日には、蒸し風呂のような暑さで汗がだらだらと流れて、臭気は鼻を衝きます。それで痒いので肌を掻くと、蝨が爪の間に入ってくる。蟻蝨の蟻は、蝨の卵の事です。その蝨と卵がお互いに喜んで、私の禪の中で我が世を謳歌し楽しんでいるのであります。

「また一笑すべし」、こういふところが東湖先生の豪快なところですね。こういふ不幸な状態の中でも、辛いという事は言われない。一笑すべしと笑い飛ばしてします。

しかも次の資料を見て下さい。

文天祥の土室に比べれば「玉堂華屋」正気漲る

抑も余の舎、矮しと雖も、之を天祥の土室に比せば、猶玉堂華屋のごとし。則ち塵垢の爪に盈ち、蟻蝨の膚を侵す、未だ吾が正気を以て之に敵するに足らざるなり。

(同 前)

文天祥の土室に比べれば「玉堂華屋」であると言っています。自分の居る処は、小さい低い家である。しかしこれを天祥の捕らえられていた土室に比べるならば、なお玉堂華屋の如し、蝨に食われ汗がだらだら流れているけれども、大邸宅のようなものですよ。

さて、その文天祥ですが、西暦一二三六年から八二年までの人で、日本の鎌倉時代に当たる頃の人です。南宋の忠臣で、南宋が元げん（モンゴル）の攻撃をうけて、滅亡の危機に曝された時に身を挺して抗戦し、遂に捕らえられて土牢に閉じこめられてしまいました。そしてフビライから元王朝に仕えよと変節を強要されました

が、頑として拒否した為、到頭処刑されてしまいました。その土牢の中で作った漢詩が、有名な五言六十句の『正気歌』であります。

一部だけ資料に書いて置きました。

「天地正気あり、雑然として流形を賦る。」

天地の間には正大至純の正気があります。「雑然」は、様々に分かれて、という意味です。「流形を賦（くば）る」と一般に読んでいますが、「流形に賦（ふ）す」と読んだ方が良いとも言われています。「形の有る諸々のもの」という意味です。天地の正気が様々に分かれて無数のものとなって表れております。

「下は則ち河嶽となり、上は則ち日星となる。」

例えば、下は則ち黄河や泰山となり、上を見ると太陽や星の光となっている。みな正気が表れているのである。間は省略しますが、最後に、

「風簾書を展べて読めば、古道顔色を照らす。」

風の訪れる軒端で、古書を開いて読んでいると、昔の忠臣義士はこの世に居ないけれども、そういう書物の中に、忠臣義士が身を以て行なった節義というものが書かれており、書物を読むことによって、ありありと我が顔色を照らしてくれる。まさにその人、忠臣義士と向かい合って物語をしているような思いである。

こういう「正気歌」を文天祥は作った。そして遂に斬られた。文天祥の閉じ込められていた土室に比べれば、私の居る部屋などは玉堂華屋の如し、「塵垢の爪に盈ち」、塵や垢が爪の間に一杯になっても、「蟣蝨の膚を侵す」、私の皮膚を食い荒らしても、「未だ吾が正気を以て之に敵するに足らざるなり」、私が心の中に持っている正気が絶対に垢だとか蝨には負けないんだ。この正気さえあれば垢蝨には勝てる。まさに東湖先生の心意気です。

資料を見て下さい。これも『回天詩史』の中に書かれている言葉で、「道理心肝を貫き、忠義骨髓を填む。……然る後正気中に充実し、」というのがあります。

これは、北宋の時代、わが国の平安時代の中頃にあたる人ですが、宋の蘇軾（蘇東坡）が「李公擇に與ふる書」というものを書いておりました、その中に出て来る言葉です。道理というものが心の底まで真直ぐ貫いており、忠義が骨の髄を填めるまで溢れている。私の体は道義と忠義によって充たされている。これは有名な言葉で、色々な人が使っています。

この気持によって、心の中に正気が充実し、どんなに垢や汗にまみれて、堪え難い暑さの中の生活と戦うような日々であっても、私は絶対に負けない。屈しないのだ。という心意気を示した言葉です。

そうした中で、東湖先生は幾つかの著述に邁進致します。

五月十一日には、『東湖隨筆』を起稿します。五月十六日には、『回天詩史』を書き始めました。この『回天詩史』は、東湖先生自身が生れてから弘化甲辰の変で処罰されるまでの三十九年間、まだ一生が終わった訳ではないけれども、生涯を回顧して「三たび死を決して而して死せず」にはじまる十四句の漢詩です。漢詩そのものは「述懐」となっておりまして、これが「回天詩」と言われる部分で、その「回天詩」の謂れ、歴史的背景というものを書いた部分が「史」であります。「回天詩」という詩ではありません。

「回天詩」を賦し、三たびの決死の事情、自らの胸中を書き記した自叙伝と言つて良いでしょう。その中には、自身の深い反省、深い思索、そういうものを突き詰めて行きまして、最後の四句に、見事に東湖先生の精神を吐露されています。

苟も大義を明かにして人心を正さば、皇道奚ぞ興起せざるを患へん、
斯の心奮発神明に誓ふ、古人云ふ斃れて後已むと。

とにかく、大義を明らかにし（大義は道德の根本であります。）、日本人の心を正すことが出来るならば、皇道（日本の道）がどうして奮い興らないことがありませんか。必ず興起するのであります。この心を神様に誓い、私は奮発するのであります。昔の人が言っているではありませんか。死んではじめて動きを止めるのだ。死ぬまで続ける。だから、私は一生をかけて、「大義を明らかにして、人心を正す」ということを実践して行く。それが日本の道を明らかにし、日本人の心というものを正して行くことになるのである。それが私の使命である。という気持を述べておられるのであります。

天下に魁て「大義を明らかにして、人心を正す」という回天の志と、「斃れて後已む」の念願達成の気概を示された漢詩であり、それを解説した文章であります。これはあくまでも東湖先生の自叙伝であります。

さて、八月になりますと、『常陸帯』という文章を執筆されます。これは漢文ではなく和文です。非常に流麗な和文であります。東湖先生といえますと漢学者というイメージがありますが、国学も実によく勉強された方で、若い時に神道の研究もされていますから、和文もよく勉強されたのでしょう。

『常陸帯』は上下二巻の書物でありまして、烈公が文政十二年に第九代の藩主に就任されてから弘化元年に至まで、烈公が迫り来る国家の危機に直面して、国防・政治・経済・教育などの上で、常に尊王愛民という精神に基づいて、いかに努力され、尽力されて来たか。それを東湖先生は非常な情熱と真心を込めて記述していま

す。

そういう烈公なのに、どうして幕府はこのような無実の罪を着せるのか。その無実の罪は絶対に晴らす。晴らすためには、決して七箇条の嫌疑のようなことは無いのだということ明らかにしなければならぬ。それを明らかにする為に、『常陸帯』を書いた。こういうわけであります。

これが後にだんだん筆写されて行きました、幕末の志士に大きな影響を与えたようです。有名な長州出身の伊藤博文が、「常陸帯を讀みて」という和歌を作っております。

ひたちおび読めば涙の玉ぞちる人をうごかすひとの真ごころ

余計な解説はせずに、読み味わっていただきましょう。

そういう執筆をしている間に、また家族とも実にこまめな手紙のやり取りをやっておりますね。小石川に蟄居中だけに限定して、その数を数えてみました。弘化元年五月七日から二年の二月十一日まで九カ月の間に、お母さんの梅子さんに対して二十四通、奥さんの里子さんに対して七通、妹の嘉能子さん宛九通、妹の雪子さん宛一通、合計四十一通。その他に断簡といって一部分のものが一通あります。これが「水戸藤田家旧蔵書類第二」の中に出てきます。

お母さんからも手紙が来ます。東湖先生は本当に家族思いの人ですよ。その手紙の中では、お母さんの健康を気遣い、子供の建次郎、のちの健さん、長男の小野太郎は早く亡くなっていますので、次男の建次郎が跡継ぎになります。三男が大三郎、四男が小四郎。特に建次郎には強い期待感をもっておりまして、建次郎は体の弱い子供だったんですね。東湖先生は手紙の中でその事を気遣い、いろいろなことを書いて送っています。

またお母さん、嘉能子さん、雪子さんなども和歌のやり取りをやっておりまして、本当に家族というものを大事に考えておりました。

この時期、東湖先生の生活費はどれぐらいかかったかということですが、一カ月に大体一両はかかっています。一カ月一両は何としてもかかる。これは米相場で換算しなければなりませんので、一概には言えませんが。例えば、今、茨城のコシヒカリが農家直販で、10kgで四千元前後ですね。一時五千元位までいったことがあります。解りやすく五千元と致しましょう。10kgで五千元。昔はある時期、一石が一両と言われましたので、それを元にして計算しますと一石は百五十kgです。から、10kg五千元として七万五千元。一両は七万五千元、高い時で十万円位でしょう。そうしますと、東湖先生の一カ月の生活費は七万五千元から十万円位ということになります。

この中から、家僕に対する給金も払わなければならぬ。これは大変です。今、東京辺あたりの大学に通わせているお子さん達、部屋代なども含めて十万円はかかりますね。十万円では足りない子供もいるでしょう。東湖先生は家僕を二人ほど雇って、しかも七万五千円位で生活しなければならぬのですから、好きなお酒も余り飲めません。でも、東湖先生はなんとか飲もうとしています。あくまで薬だということでは許可を貰いまして、ほんの僅かですが、家僕が外出してお酒を買って来てくれますと、本当に美味そうに飲まれたんだそうです。蟄居中でも酒だけはやめなかったようですね。

その頃には、何というお酒を飲んでおられたのか判りませんが、東湖先生が飲まれたお酒で有名なのは「剣菱」だということになっていますが、実際には「麴の月」というお酒を好まれたという話もあります。まさか蟄居中に、そんな銘酒は飲めませんから、安く手に入るお酒を飲んでおられたのでしょう。

2 小梅下屋敷での幽閉

やがて、弘化二年二月二十一日、数え年四十歳、小梅村の水戸家下屋敷に移されます。今の墨田区向島、隅田公園。高速道路の向島線の下にあります。水戸から参りますと右手の方に隅田川、左手にこんもりとした森があり、牛島神社や公園があります。そこが小梅の水戸家下屋敷です。

今度幽閉された処は六坪の部屋でした。約二十平米ですね。この部屋の書齋名を「蹇齋」と名付けました。「蹇」というのは、足が萎え曲がるという意味です。一方では、身を尽くして主人に仕えるという意味もありますので、両方の意味で名付けたようです。

この小梅村に移った時に、東湖先生は「新に小梅村の謫居に徙る三首」という漢詩を作っておられます。そのうちの一首は「幕末と明治の博物館」にも軸装されて保存されています。勿論これは『東湖遺稿』の中にも収められています。

漢詩「新に小梅村の謫居に徙る三首」の一首

蟻屈豈伸ぶるを求めん、 龍蟄僅に身を存す。

故園は筑山の北、 謫居す墨水の濱。

門戸は鎖鑰嚴にして、 吏卒は吾が隣を護る。

縲綫に遭はずと雖も、 奚ぞ獄中の人に異ならん。

丹心猶我に随ひ、 未だ必ずしも辛苦を嘆かず。

黄卷亦我に伴ひ、 好んで古賢と親しむ。

悠なるかな小窓の下、 睥睨す三千の春。

簡単に読んでみますと、

「蠖屈豈伸ぶるを求めん」蠖屈というのは尺取虫のことです。いま自分は尺取虫のように縮こまっており、伸びようとしても伸びられません。

「龍蟄僅に身を存す」土の中にじっと身を潜ひそめている龍のように、僅かに自分の身を置いています。

「故園は筑山の北」自分の故郷は筑波山の北の方にある。

「謫居す墨水の濱」しかし今は隅田川の畔ほとりに蟄居を命ぜられている。

「門戸は鎖鑰嚴にして」鎖は錠前、鑰は鍵のことです。戸口には厳重に鍵がかけられて、

「吏卒は吾が隣を護る」役人が私の家の周りを警護している。

「縲綹に遭はずと雖も」縲綹は罪人を縛る黒い縄のことです。縄で縛られているわけではないけれども、

「奚ぞ獄中の人に異ならん」結局は牢獄の中の人と変わらないでしょう。

「丹心猶我に随ひ」しかしながら私の真っ赤な燃え盛る心は、自分の身に付いています。

「未だ必ずしも辛苦を嘆かず」こういう苦しい状況の中でも、私は決して嘆いてはおりません。

「黄卷亦我に伴ひ」黄卷は書物です。私には書物があります。

「好んで古賢と親しむ」書物を読んで昔の賢人と会い、親しく話をするのが出来ます。

「悠なるかな小窓の下」小さな窓ではありませんけれども、そこから隅田川の流れを悠々と眺めて、

「睥睨す三千の春」単に窓から見える景色だけでなく、自分の心の目で天下・世界を睥睨する、見下ろす。隅田川には桜が咲いている。その春を、私は高い所から見下ろしているようなつもりですよ。

と、こういう詩ですね。

こうして小梅村に移っても、状況は前とはそんなに変わらない。しかし東湖先生の心意気は非常に豪快なものがあるわけであります。

さらに次の漢詩です。

漢詩「八月十八日夜、夢に諳厄利亞を攻む」

絶海の連櫓十万の兵、雄心落落胡城を圧す。

三更夢覚めたり幽窓の下、唯秋声の雨声に似たる有り。

『東湖遺稿』

この年の三月にアメリカ船が浦賀に漂流民を送って来ます。五月にはイギリス船が琉球に来て貿易を強要します。七月には同じくイギリス船が長崎にやって来まして、測量の許可と薪水の供与を求めています。こういう知らせが東湖先生の耳に入ってきています。

そこで東湖先生は、八月十八日の夜に夢を見られます。

「**絶海の連櫓十万の兵**」絶海というのは、海上遙かに、連櫓は マストを連ねて 沢山の船が、十万の日本軍を乗せて、

「**雄心落落胡城を圧す**」海上遙かにイギリスの城を攻めて、これを制圧する、そういう状況を夢の中で見た。今イギリス船が日本にやって来ている。逆に日本が艦隊を仕立てて、艦隊がイギリスの城を攻めて行く。そしてその城を瞬く間に落として行く。それを私は夢の中で見た。

「**三更夢覚めたり幽窓の下**」しかし夜更けに夢から覚めてみると、自分は幽閉されて小さな部屋にいる。

「**唯秋声の雨声に似たる有り**」そこには木の葉が秋風によって打ち鳴らされて、寂しい雨音のように聞こえているだけである。

しかし、私は夢の中でもイギリスを攻めてきた。東湖先生はこのように吟ぜられているのであります。

そして十一月には、「**文天祥正気の歌に和す**」いわゆる「**正気歌**」五言七十四句が作られるのであります。

「**正気歌**」は二年前に、この水戸学講座で講義させて頂きましたので、詳しい解説は省略させて頂きます。

漢詩「**文天祥正気の歌に和す**」

天地正大の気、粹然として神州に鍾まる。

秀でては不二の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ。

……………(中略)……………

死しては忠義の鬼となり、極天皇基を護らん。

東湖先生は、歴史上、正気によって生きた人物達の事績を挙げて行かれ、最後に、その正気を維持して行くのは我が水戸藩であるが、しかし中心となる烈公が今敵しい状態にある。私は現在自由のきかない状態にあるけれども、若し生きて自由の身を取り戻す事が出来たならば、烈公の無実の罪を必ず雪ごう。死んだならば忠義の鬼きとなる。この場合は「おに」ではなく、「神」であります。忠義の神となつて天の極まるまで日本の国の基を護持しよう。こういう歌を作られました。

この「正気歌」は、我が国の天地自然の美しさ、それは正気が鍾まつたものであり、同時にまた歴史上の人物に正気が宿つて、日本の国の命脈が絶えようとする時に、命をかけてそれを護つて来た。日本の歴史というものは、ただ漫然と万世一系の道を続けて来たのではない。その時その時に、命が絶えようとする時に、この正気によつて、自らの命をもつて、国の命脈を救つて来た。そういう人達が居たら、日本の二千年の歴史が続いているのだ、そういう心で詠まれているわけであります。

しかもこの「正気歌」というものは、藤田家の正に三代を貫く精神でありました。

お父さんの幽谷先生も、文天祥の正気歌を愛唱されました。八、九歳の頃にそれを聞いて育つた東湖先生は、自ら「文天祥正気歌に和す」を作られました。

そして四男の小四郎も亦「正気歌」を作っているのです。これは余り知られていませんけれども、拳兵して筑波山に居る間に作つたらしい。扇面の両面に自ら書いています。これはある時期まで真壁町に在つたそうで、西村文則さんの『藤田小四郎』という書物に扇面の写真が掲載されています。現在、書き写されて屏風仕立てになつたものは真壁町にあります。自筆の扇面は所在不明です。風聞では習志野市のある方が所蔵されていることですが、まだ所在の確認は取れておりません。この小四郎の自筆の扇面が見つければ、「藤田家三代正気歌」というのを書いてみたいと思っています。

さて、十二月十一日から、東湖先生は『弘道館記述義』の執筆を開始されています。翌年弘化三年六月には大体出来上がるのですが、その後も推敲を続けて行きます。

これは『弘道館記』の一句一節を解説した書で、上下二巻の書物です。上巻は歴史上に於いて日本の道がどのようにして実践・確立され、いかに継承されてきたかという、日本の道統について記述されています。下巻に於いては、その日本の道統を、現実の情勢の中でいかに顕現するかということ、熱誠を以て論述されています。

この書は、東湖先生が「神州の大道」を明らかにすることを一大目標とし、東湖先生自身が天保四年一月から六年六月まで神書取調という仕事を烈公から命ぜられ、その間に研究された成果が現われて来ております。東湖先生自身が持てる力というものを傾け尽くした畢生の大著であります。

このことは、東湖先生も自負心を持っておられたようで、後に体が具合悪くなつて病気で死ぬのではないかと覚悟された時に、遺書代わりに同僚の高橋多一郎愛諸に宛てた『許々路迺阿登（こころのあと）』という文章の中で、次のように言われております。

高橋多一郎愛諸宛『許々路迺阿登』（弘化四年十一月五日）

神州の大道を明にいたし候に至り候ては、弘道館記述義と申す著述脱稿仕候間、僕が生平の学問見識、他日はにて御承知可_レ被_レ下候。

『新定 東湖全集』

日本の大道を明らかにするにはどうするか。そのために『弘道館記述義』という書物を著しました。私の日頃の学問見識を知るためには、これをお読み下さい。と記されています。自分の最後の書物になるであろう、そういう覚悟と決意・決心で書かれたものでしょう。

3 水戸の横竹隈町に移される

ところで、東湖先生は弘化元年五月に小石川に幽閉されましたが、その年の九月十六日に、留守家族が住んでおりました水戸の上梅香の邸宅が、今の「水戸好文カレッジ」の所ですが、これが没収されます。そして新に下市の横竹隈町に屋敷地を与えられました。全く何も無い所に家が建てられたのかどうかは判りませんが、東湖先生の手紙を読みますと、粗末な建物を造っているような事がうかがえます。

敷地は大きかったようですが、なかなか出来上がらなくて、やっと翌年三月に出来上がってお母さん、奥さん、子供達が移ります。場所は何処かはつきりしませんが、多分、ジャスコ下市店の西側の横丁付近であつたろうと思います。

さて、弘化三年、東湖先生四十一歳の十二月二十九日に、幕府から蟄居解除の命が出ます。さあ、これで自由になれるかと思つたら、駄目なんです。水戸藩は当時、保守重臣層が藩政を牛耳っておりまして、藩庁からは許しが出ず水戸へ移れということになり、「遠慮小普請組」という処置がなされます。遠慮は家の門は閉ざしておかなければなりません、夜中に目立たないように出入りしても良い、とい

うことです。小普請組というのは何の役目もない予備役のことです。

東湖先生は、翌弘化四年正月二十四日に江戸を発ちまして、取手宿・稲吉宿に泊り、二十六日の午後に入水に入り、横竹隈町の自宅に到着します。

ほつとしたのも束の間、間もなく体調不良になりまして、まず凝（血のしこり）という病気になるます。四月には下血、五月には痔漏、七月には脱肛・小便閉塞と、これだけ病気が重なります。長い間、非常な悪環境の中で、ジツと座って生活して来た結果がこういうことになったわけであります。病状は悪化して来ました。東湖先生は医者にかかっても治らないと考えまして、自分で薬を調合して養生に努めました。

十月二十四日には、藩庁から「隠居・慎」という命令がありまして、没収されていた家禄が回復されました。その代わり隠居しろということで、次男の建次郎（のちの健）に家督を譲ります。しかし病気は一向に良くならない。十一月には病気による死を覚悟しまして、先程ご紹介しましたように、遺言の形で『許々路迺阿登』を同僚の高橋多一郎愛諸に託しました。

ところが、死を覚悟したほどでありましたが、だんだん病状は回復に向かってきました。薬の調合を自分でやったのが良かったようです。体力、気力も回復して来しました。

そして、嘉永二年（一八四九）四十四歳の八月には、家塾「青藍舎」を再興します。お父さんの幽谷先生が始められた青藍舎です。東湖先生もここで学ばれ、お父さんが亡くなられた跡を受け継いで、門人達を教育されておりましたが、弘化甲辰の国難以後はしばらく中断されていました。それを再興されたのであります。

前年の七・八月頃から門人も出入りし、塾生も密かに置かれたようです。そして『孝経』や『論語』の会読が正式に始められたのが嘉永二年八月二十五日でありました。

その半年ほど前ですが、二月十二日付けの『原田兵介に答へし書』の中で、東湖先生は次のように言われております。

乍^レ不^レ及、子弟の俊秀見立、切磋琢磨仕り、神儒文武合一の学風天下後世へ相伝候義、愚生終身の心願に御座候。

『東湖先生の反面（一名「東湖書簡集」）』

私は、優れた若い人達を見立てて、切磋琢磨して、神儒文武合一の学風というものを天下後世に伝えて行くために、子供達を教育したい。それが私の生涯の心から

の願いであると、このように書いています。東湖先生は、教育ということを自分の一生の仕事だと考えて居られたようです。

五 謹慎解除・自由の身

やがて嘉永五年（一八五二）四十七歳を迎えます。ペリー来航の前の年でありませんが、二月十六日に宅慎解除になります。この少し前、嘉永四年十二月から一月にかけて、水戸に来られたのが吉田松陰先生です。東湖先生に会うために来られたのです。ところが東湖先生は宅慎中で、他藩の者とは会うことが出来ません。そこで松陰先生は、会沢正志斎先生とか豊田天功先生に会うのであります。もうちょっと前に東湖先生が解除されていけば会えた。この二人、会わせなかったですね。

さて、東湖先生は、弘化元年の蟄居以来足掛け九年ぶりに自由の身になりました。そして青藍舎での門人教育に精を出していましたが、嘉永六年（一八五三）五月頃から半身不随の状態になってしまいました。そこで医者勧めなどもありまして、五月の末から約三週間、湯岐温泉の和泉屋に湯治に行きました。現在の福島県塙町湯岐の和泉屋旅館です。

私も先日湯岐の和泉屋旅館に湯治に行つて来ました。和泉屋には東湖先生自筆の立派な掛軸がありまして、私も見せて頂きました。庭の石碑にそれが彫つてありました。テレホンカードも貰いました。ところがそれには東湖先生が「湯岐温泉」と命名したと書いてありました。これは間違いです。お父さんの幽谷先生が既に来ておりまして、漢詩を読まれ部屋の扁額に表装されて掛けられておりましたが、それには「湯岐温泉」と書いてあります。ですから幽谷先生よりも前から「湯岐温泉」の名称があったことになりました。

湯岐温泉は本当に山奥の温泉です。東湖先生が読まれた漢詩は何首かありますが、その一つをご紹介します。

漢詩「湯岐客舎即事」

温泉両道に涌く、湯岐と称する所以なり。

浴客同病多く、晤言舊知の如し。

閑中千里の夢、塵外一椀の棊。

坐して見れば人烟起り、家々又晚炊す。

『東湖遺稿』

温泉が二筋に岐れて涌いているのです。それで湯岐と言うのです。晤言というの

は、お互いに打ち解けて話あうことで、「同病相哀れむ」という言葉のとおり、一度も会ったことのない人達でも、同病ということと、とたんに打ち解けることがありますね。まさにそのことを言われているわけです。一枰は碁盤のことです。碁は碁石です。のんびりと湯につかり、浴客と碁を打たれているのでしょうか。悠然とした気持です。旅館は高い所にありますから、下に広がる村の家々からは、夕飯の準備をする煙りが上がっているのが見える。暫しのんびりとした雰囲気味わっている詩であります。

その湯治中の六月三日（西暦では七月八日）に、アメリカ東インド艦隊司令長官兼遣日特使のマシュー・カール・ブレイス・ペリーが浦賀に四隻の黒船を率いて来航しました。

おそらく湯岐温泉に在る間に、東湖先生の所にも使いが来たことと思います。そして烈公はやがて七月三日に幕府の海防参与に就任します。幕府からの要請によつて、この難しい情況の中で、是非烈公のお知恵をお借りしたい、ということとす。

すると今度は、江戸の藩邸から東湖先生に命令が来まして、直ちに江戸に出よということになりました。そこで七月六日に戸田忠敞や山国兵部共昌らと一緒に江戸に出ることになりました。そして東湖先生は烈公の参謀格ともいえる海岸防禦掛に任命されます。こうして東湖先生は再び自由の身として、しかも烈公を助ける重要な役割を担う、天下の藤田東湖先生として登場して参ります。

ここからの話は、次回の杉崎仁先生のお話ということになります。

六 東湖流読書の秘訣

最後に、私共にとって大変役に立つ東湖先生の言葉を一つご紹介致します。嘉永五年（一八五二）七月二日付けで寺門政次郎に宛てた手紙の一節です。

読書博を貴び候得共、うはすべり致し候而は、何程万巻を読候由も用をなし兼候半哉。古人の所謂眼光紙背に透ると申如く読度事に御座候。次第々々の世に生れ候程、読書多く相成申候。（中略）博を貴び候中にも、其要を得候様肝要と存候。

歴史なども唯ばつと読候よりか、何歟一つの講究著述の心得に而読候方、格別に益を得候様相覚申候。

『東湖先生の反面（一名「東湖書簡集」）』

どんどん広くいろいろな本を読めと言うけれども、上滑りして、ただ目で読んでいるだけでは、用に立たないではないか。古人の所謂「眼光紙背に透る」というように、文字に表れたその奥の意味をしっかりと捉まえる、そういうような読み方をすべきではありませんか。後から生れるほど本は多くなって行く。これは大変な事。そんなに読めるものではない。沢山読むことは大切ではあるけれども、大事なことは、その書物のポイントをしっかりと掴んで読むということを、心がけるべきではありませんか。

歴史なども唯バツと読むよりは、何か一つ自分でテーマを持って、それをまとめてみよう、研究してみよう。こういう心得をもって読む方が、本当に益があるのではありませんか。こういう教えですね。これは、私もその通りだなあ、と思います。東湖先生はこういう身近なところから親切に教えられているんですね。

七 おわりに 苦節逆境下に東湖先生を支えたもの

東湖先生は、三十九歳の蟄居幽閉から、四十八歳で海岸防禦掛りとして政界に復帰するまで、足掛け九年の間、非常な苦節逆境の中で生活をされて来ました。そうした苦節逆境の中で東湖先生の心を支えたものは何であったか。それは、

「加治吉次郎に復せし書簡」(弘化二年五月七日付け)

只々一点の正気にてのみ凌ぎ居候事故、少し正気ひるみ候へば、病を引受候事と存候

『東湖先生の反面(一名「東湖書簡集」)』

私は正気によって苦境を凌いでいます。正気が無ければ、必ず病気になってしまいます。

そして、東湖先生がめざしたものの、それは、

「神聖の大道を發明し、天地の正気を鼓舞する」

「大義を明らかにし、人心を正す」

ということでありました。これが東湖先生の「至願」であります。この上もない願い、最上の願いであります。

まさに東湖先生は自らの正気によって、道を実践されていった生涯であったと思います。

今回は、天下の藤田東湖先生として活躍される所を、杉崎先生からお教え頂いて欲しいと思います。長時間、御静聴頂き有難うございました。これをもって終わら

せて頂きます。

(平成十年十一月一日講座)

(県立茨城東高等学校教諭)